

修士論文要旨
2013年1月

母語場面と接触場面における中国人日本語話者のあいづちの特徴

指導 堀口純子 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
211J3005
許 禎

目次

第1章	はじめに	1
1.1	研究背景	1
1.2	研究目的	2
1.3	本研究の位置づけ	2
1.4	本研究の構成	2
第2章	先行研究	3
第3章	調査概要	7
3.1	調査協力者	7
3.2	調査方法	8
第4章	分析方法	9
第5章	分析と考察	10
5.1	形式について	11
5.1.1	接触場面におけるあいづち詞の形式	11
5.1.1.4	接触場面におけるあいづち詞の形式についてのまとめ	13
5.1.2	母語場面におけるあいづち詞の形式	16
5.1.2.4	母語場面におけるあいづち詞の形式についてのまとめ	18
5.2	頻度について	20
5.2.4	日中会話におけるあいづち詞の頻度についてのまとめ	21
5.3	機能について	24
5.4	会話相手の印象について	35
第6章	まとめと今後の課題	36
6.1	まとめ	36
6.2	本研究の限界	38
6.3	今後の課題	38
	謝辞	
	参考文献	I
	添付資料	
1	: 同意書 (日本語様式)	①
2	: 同意書 (中国語様式)	②
3	: 会話資料	③

「あいづち」は会話を円滑に進めていくために欠かせない要素である。稿者は中国人日本語話者として、あいづちを誤って使ってしまい、相手に誤解されたり、思わず失礼なことになったりする経験があって、先生とのコミュニケーションにうまく取れないことで一時的に落ち込んでしまった。また、一時帰国した際には、頻繁にあいづちを打つことで年配者に叱られたこともあった。しかし、あいづちにおける数多くの先行研究には、学習者による接触場面におけるあいづちに関する研究はあるが、母語場面におけるあいづちの特徴に焦点を当てた研究はあまり見られない。本研究では、あいづちの表現形式の中で一番多く見られるあいづち詞に焦点を当て、「形式」、「頻度」、「機能」から中国人日本語話者が接触場面と母語場面で会話する時はどのような特徴があるかを明らかにすることを目的とする。その結果は以下のようにまとめられる。

- 1) あいづち詞の形式について、接触場面では単独型の「うん系」あいづち詞が最も多く使用されていることが分かった。「え系」あいづち詞は使用しない傾向がある意識的に使っていることに変化していることが分かった。また、母語場面では、「嗯〔en〕系」あいづち詞が多用されていることが分かった。母語場面においても接触場面においても発音が似ている「うん系」と「嗯〔en〕系」あいづち詞を多用する傾向がある。日本語の「え系」を意識的に会話で用いた一人の調査協力者のみ母語である中国語の会話でも使用していることが分かった。接触場面においても母語場面においても冒頭が似ている「あ+〇系」と「啊+〇〔a+〇〕系」を多用していることが分かった。
- 2) 日中のあいづちの頻度の違いについて、中国語でのあいづち詞を打つ頻度は日本語のそれより低く、約 2 分の 1 である。日本語のあいづち詞を打つ頻度が高い人は中国語の頻度も高く、日本語のあいづち詞を打つ頻度が低い人は中国語の頻度も低いという傾向があることがわかった。中国人日本語話者のあいづちの打つ頻度は日本にいる滞在期間と関わっている。
- 3) 機能面では、接触場面と母語場面における「うん系」あいづち詞と「嗯〔en〕系」あいづち詞を多用する理由については、単に発音が似ているだけではなく、機能として多く見られたのが両者とも「聞いている表示」と「同意・共感の表明」であり、その点でも共通していることが明らかになった。従来、終助詞として扱われることが多く「ね」があいづち詞として主に「同意・共感の表明」の機能をしていることが明らかになった。また、中国語のあいづちでは「ネット用語」が「感情の表示」として機能していることが明らかになった。
- 4) 会話相手の印象について日本人側は特に違和感がないと述べている。中国人側はあいづちを多く打つことにより、「真面目に聞いていない」というマイナスの印象をもたらしている。

本研究は中国人日本語話者の接触場面と母語場面におけるあいづちの特徴を明らかにすることで、日本語教育におけるあいづち指導、中日接触場面における相互理解への示唆を得られると考えるからである。

キーワード：あいづち、接触場面、母語場面、あいづちの表現形式、あいづちの頻度、あいづちの機能

参考文献

- 伊豆原英子 (2003) 「終助詞「よ」「よね」「ね」再考」『愛知学院大学教養部紀要』 51(2)、1-15、愛知学院大学
- 今石幸子 (1998) 「日本語学習者のチュートリアルにおけるあいづちとその周辺—フォローアップ・インタビューによる談話分析を中心に」『阪大日本語研究』 10, 111-127
- 大浜るい子 (2002) 「相づち使用と対人関係」『広島大学日本語教育研究』(12)、広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座
- 大浜るい子 (2006) 『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』 溪水社
- 小宮千鶴子 (1986) 「相づち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』 3、大東文化大学語学教育研究所 43-62
- 堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』 64、13-26
- 堀口純子 (1991) 「あいづち研究の現段階と課題」『日本語学』 10-10、31-41
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』 くろしお出版
- 水谷信子 (1984) 「日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析—」『金田一春彦博士古稀記念論文集第二巻言語学編』 三省堂
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』 7-12, 4-11
- 水野義道 (1988) 「中国語のあいづち」『日本語学』 7-13
- メイナード・K・泉子 (1986) 「日米会話におけるあいづち表現」『月刊言語』 16-11、88-92
- メイナード・K・泉子 (1993) 『会話分析』 くろしお出版
- 山本恵美子 (1992) 「日本語学習者のあいづち使用実態の分析—頻度および種類—」『言語文化と日本語教育』 4、お茶の水女子大学 22-34
- 楊晶 (1997) 「中国人学習者の日本語の相づち使用に見られる母語からの影響—形態、頻度、タイミングを中心に—」『言語文化と日本語教育』 13、お茶の水女子大学 117-128
- 柳川子 (2002) 「台湾人日本語学習者における相づち使用の考察—相づち詞の種類を中心に—」『日本語教育と異文化理解』 創刊号、愛知教育大学国際教育学会 45-53
- 柳川子 (2003c) 「台湾人日本語学習者の相づち表現—滞日経験のない上級学習者の場合—」『言語文化と日本語教育』 25、お茶の水女子大学 66-77
- White, Sheida (1986) Functions of Backchannels in English: A cross-cultural analysis of Americans and Japanese. Unpublished doctoral dissertation, Georgetown University

参考 Web サイト

<http://baike.baidu.com/view/181979.htm> 2012年11月7日に検索

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%AA%AC%E6%96%87%E8%A7%A3%E5%AD%97>

2013年1月2日に検索